

バリアフリー改修工事～右麻痺の夫が使う玄関

増築工事から約 10 年後、夫が脳の病気を発症した。長時間に及ぶ手術の末、余命 1 カ月を宣告されたが、病院と施設を合わせて 1 年 10 か月の療養期間を経て帰宅することができた。その間に、使えないヨメのせいで老老介護を余儀なくされていた義母が骨折して入院、義父は老人保健施設をハシゴせざるを得ないという事態に至った。当時、団地の 3 階でノウノウと暮らしていた私にこれまでのツケが回ってきたと言うべきか、夫の病院、母の病院、父の施設、ネコの棲む養蚕農家と 5 カ所を駆けずり回る生活が始まった。拠点は夫の病院で、最初の 2 か月半は病院の簡易ベッドを借りて泊まり込んだ。

しかも、ひとり設計事務所で仕事を請けてきているから代替要員もなく、もうすぐ建前の家も待っているから仕事を中断するわけにはいかない。頼りにしていた大工さんの都合がつかず、別の大工さんを紹介してもらったところ、何とその大工さんは、病院のすぐ横に住んでいるとのことで打ち合わせはいつも病院のロビーでやってくれた。雨の日も図面片手に傘をさして来てくれるので大助かりだったが、打合せの最終日、『どうしていつも病院で打ち合わせなのか』と尋ねられ、理由を言ってなかったことに初めて気付かされる始末だった。

入院生活はあわただしい。昨今の病人は安心して入院してられない。いつの頃からか入院が期限付きになってしまい、入院してもすぐに次の行く先を探さねばならない。母が二つ目の病院に移ってから 1 カ月が経つ頃、また退院先の話が出た。大腿部の骨折で歩くことはもう無理らしい。係りの職員に家族の事情を話すと、これまた何と新築でまだ満床になっていない施設が近くにあるからと、その場で連絡するよう指示された。申し込み手続きを済ませて何日か待つうちに、長期間受け入れてくれる病院もあるなどの情報をくれる人もあったが、実に運よく入所が決まった。その数か月後、ショートステイのハシゴを繰り返して口数が少なくなっていた父も、信じられないことに母と同じ施設に入所できることになった。ほとんど寝たきりのはずの父が『おめさんの献身的な看病で××(夫の名)は良くなった』と、まるで見ていたようなことを言うのには驚かされた。父母が入所してきたこの新しい施設は全室が約 13 m²の個室で各部屋に INAX の最新の車椅子対応の洗面台まで付いていた。食事はふたり一緒に同じリビングでとれるので父の口数も徐々に増えていったし、私が駆けずり回る箇所も減っていった。

夫には右麻痺の後遺症があった。日常生活は車椅子となったのでエレベーターのない団地 3 階の住居には入ることすらできない。病院に続いて入所した自立支援施設の入所期限は 1 年。退所にあたっては生活できる住まいが条件となっており、帰宅先の住宅には施設

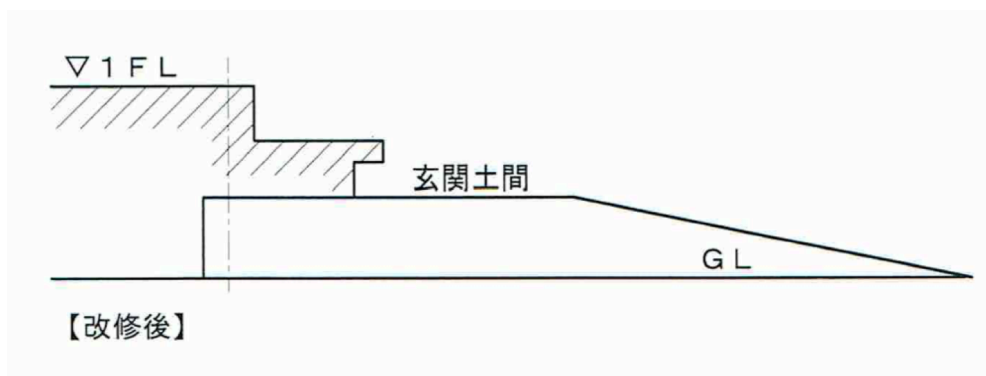
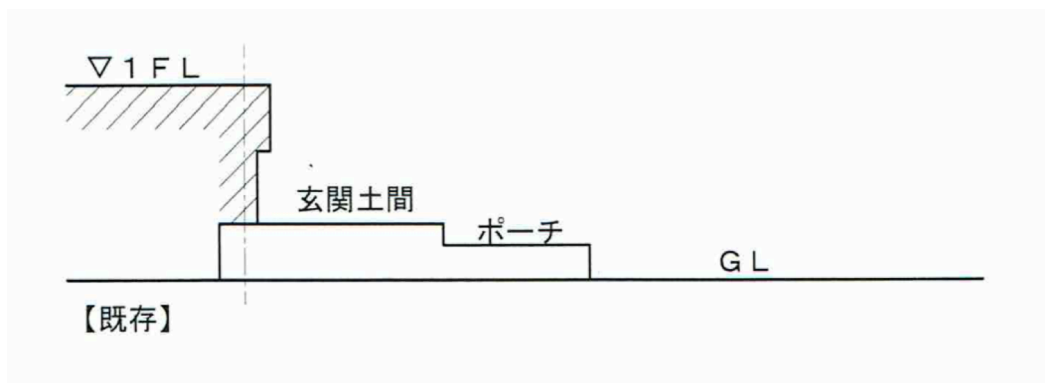
の理学療法士のチェックが入ることになっていた。片麻痺の夫が暮らせる住まいが必要なのだ。そんな住まいを造るお金も時間も私にはなかった。結局、義父母が暮らした古家を、夫が暮らせる最低限の状態に改修することになった。

10年前に増築した寝室やトイレは車椅子でそのまま使えるが、その他の部分について、現状を検証した理学療法士さんの意見は次のようだった。

- ◆家の出入りは玄関で行うこととし、玄関での出入りができるようにすること。手摺にかまれば段差を上がることはできるが、夫の場合、高さは13センチが限度である。また、靴の履き替えのためのベンチを設けること。出るときと入るときではベンチや手摺の位置が反対になるので、玄関の真ん中にベンチを設けるなどして両側から使えるようにしてはどうか。
- ◆畳の部屋を車椅子がスムーズに通れるようにする。古い藁畳は車椅子が埋まって動けなくなってしまうからだ。
- ◆玄関ポーチを含めて、外部の段差や凸凹を解消する。
主にこの3点だった。

これら理学療法士さんの指摘事項を踏まえ、以下のように改修した。

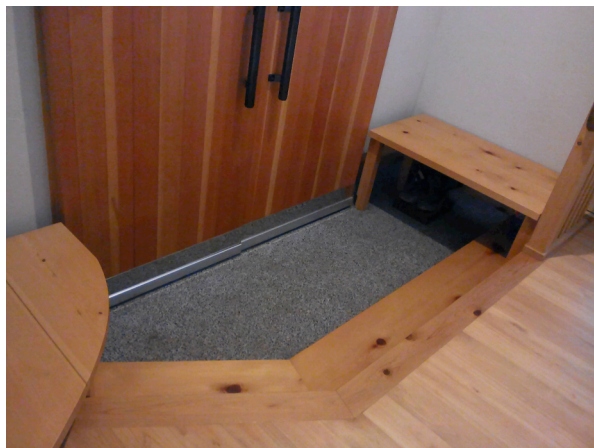
■地面から1階床までは45センチあるので、13センチ弱の段差を2段とり、1階床高から26センチ下ったところを玄関土間とする。玄関外部の段差や凸凹をなだらかなスロープで埋め、玄関土間の高さまで緩やかに持ち上げてくる。



■靴の履きかえ用のベンチは両サイドに設け、出るときと入るときそれぞれに使えるようにする。



【既存】土間から框まで高さ 30 cm



【改修後】両側にベンチを配し、式台を入れて 2 段にした

■手摺は目立ちすぎないようにさりげなく付けたい。衛生設備メーカーが多くの手摺を出しているが、あらゆる場面に対応できるように考えてあるため、エルボやチーズやキャップを使って必要な形状に仕上げていく。そのためどうしても手摺が目立つ仕上がりになってしまう。ホームセンターを何軒か廻って見つけたのが、写真の手摺で、一本物の木材を加工してあるので、キャップがなくシンプルである。また横に移動するための手摺はしっかり握らなくてもいいので角材を打ち付けるだけで間に合う。



DIY で見つけた手摺



ただの角材だが横手摺には充分使える

■扉の開閉は障害者にとっても介助者にとっても引き戸が使い易い。既製品の引違い玄関戸は多く供給されているが、建物が築70年と古いので既製の玄関戸では不釣り合いな厚化粧になりかねない。更にベンチを両サイドに置くことや、間口を広く取りたいこともあって、開閉方式は引き分け戸とする。引違い戸の場合は、右だけ又は左だけが開くが、引き分け戸は真ん中が開くから出るときも入るときも不自由な者には具合がいい。半自動引き戸システムの金具を使えば、どちらか片方を引くだけで、もう片方も開いてくれるので具合がいい。この金具は室内建具用であるが、背に腹は代えられない。建具の中には断熱材を挟み込み、隙間風にはピンチロックやモヘアなどで対応することにし、この金具を使って古家にも合うような玄関戸を建具屋さんに造ってもらった。



【既存】 全景



【改修後】 引き分けの玄関

(続く)